C. F. ヴァイセの児童演劇にみる
博愛精神と子どもの理想郷の世界

小　林　英起子

広島大学大学院文学研究科論集　第79巻（2019年12月）別刷

THE HIROSHIMA UNIVERSITY STUDIES
GRADUATE SCHOOL OF LETTERS

VOL. 79・DECEMBER 2019

C. F. ヴァイセの児童演劇にみる
博愛精神と子どもの理想郷の世界

小　林　英起子

【キーワード】クリスチャン・フェーリクス・ヴァイセ、児童演劇、博愛精神、感動喜劇、啓蒙時代

序

ゴットホルト・エフライム・レッシングは18世紀後半のドイツを代表する劇作家であるが、彼と同じ頃ライプツィヒ大学で一時期を共に過ごし、その後も親交を結んでいたクリスチャン・フェーリクス・ヴァイセの劇作家としての活躍も忘れてはならないだろう。ヴァイセは学生時代にライプツィヒのノイバー座にレッシングと共に関わり、外国語の脚本をドイツ語に翻訳したり、舞台を手伝うこともあった。彼は大学卒業後もライプツィヒに残り、郡税官吏として昼間働き、午後は執筆をしては穏やかで息の長い創作活動を行った。ヴァイセは当時の人気劇作家で、悲劇８篇、喜劇13篇、24の児童演劇を著わした極めて多作な人であった。その代表作には1765年の喜劇『アマーリア』があげられる。レッシングは『ハンブルク演劇論』第20号（1767年７月７日付）の中で、ヴァイセの『アマーリア』について批評している。[1]レッシングがドラマトゥルクとして支えたハンブルク国民劇場で舞台にかかったドイツの劇作家の中で、ヴァイセの作品は５つあり、これは多い方に属する。

ヴァイセは娘が誕生してからは子ども向けの道徳週刊紙「子どもの友」（1775-1782）を発刊し、その中で数々の愉快な歌、道徳の歌、寓話や散文、児童演劇作品や物語、手紙、日記等を盛り込んで両親や小さな読者の人気を博すこととなった。後期啓蒙主義の時代には、ヴァイセは児童文学の作家として人々の間でその名を知られるようになっていた。校訂版がまだ出ていないヴァイセ作品は、今後解明を待つ分野といえるだろう。

本稿は、あまり研究の手が及んでいないヴァイセという人物に着目して、彼の代表的な児童演劇作品を読み取り、その手法の特徴とそこに描かれた子どもの姿と背景にある博愛精神、そしてヴァイセの子どもの理想郷世界を探ろうとする萌芽的研究の端緒である。

１．ヴァイセの生涯

クリスチャン・フェーリクス・ヴァイセは1726年１月28日、双子の妹ヨハンネ・クリスチアーネと一緒にエルツ山地のアナベルクにギムナジウムの教師の子として生まれた。兄は14歳にして

亡くなった。ヴァイセの曽祖父も祖父も牧師であり、父は後に校長をつとめたが、42歳の時に他界した。ヴァイセ一家の経済的苦境も想像に難くない。ヴァイセは1745年ライプツィヒ大学へ進学し、文献学と神学を学んだ。彼は友人の家に間借りをし、苦しい大学生活を切り抜けたという。ノイバー座の舞台へ通ううちに、レッシングと知り合いになり、交流はその後も続くことになった。1750年大学卒業後、ヴァイセは若いガイヤースベルク伯爵の家庭教師をつとめた。1759年頃、伯爵に同伴してパリに滞在したことで、ヴァイセはフランスの演劇やオペラに触れることができた。その時の経験が後に演劇作品やジングシュピールの創作に大きく役立つことになった。1760年、伯爵と一緒にヴァイセはライプツィヒへ戻り、ひとまず家庭教師を終える。雑誌の編集を手がけた後、今度はシュトゥーベンベルク伯爵のお伴でゴータに赴いた。1762年ライプツィヒの税官吏の職に就き、翌年結婚する。この頃のヴァイセはレッシングの市民悲劇『ミス・サラ・サンプソン』に影響されて、喜劇『アマーリア』（1765）を表わした。これは当初、悲劇として書かれたが、レッシングの助言を受けて感動喜劇へと書き直された経緯がある。1765年長女ヘンリエッテが誕生し、1768年にはドイツ協会会員となる。娘の成長に合わせるかのようにヴァイセは1775年道徳週刊紙「子どもの友」の発行を手がけ、週２、３回も発行されることすらあったが、1782年まで約７年間続いた。この雑誌が評判となり、ヴァイセはドイツ児童文学の父ともされている。1804年ヴァイセは生涯を閉じている。

２．作家ヴァイセの著作における児童演劇の位置づけ

ヴァイセは現代においては名前が忘れられているが、18世紀当時ではゲラートの後を追う程の人気作家であった。創作の多作さが顕著であり、税吏の仕事の傍らで執筆の依頼も続いていた。しかしながらホルスト・シュタインメッツは、ヴァイセは質よりも量の方に優位性があると指摘する。[2]レッシングが各地を転々とする厳しい生活環境にありながら、市民階級の娘の自己犠牲や、専制君主への抵抗や、退役少佐と貴族の娘の恋や、宗教の寛容などを描いて、当時の観客の喝采を受けていたのとは異なる創作姿勢である。ヴァイセは時代の空気を読んで他の作家の作品を研究し、大衆に受けるような劇作品を好んで著した。作品の山場には感動的な台詞の応酬で観客の涙を誘う手法を得意とする。すでに学校の生徒の頃に書き上げていたという『エフェズスの未亡人』はヴァイセの処女作である。

ヴァイセはゴットシェート派の諷刺的類型喜劇の作風とは一線を画し、1760年代には『家政婦』

ンをインク瓶に隠して飲んでいたところを偶然に目撃してしまい、ばつの悪い教師から素行をがみがみとしかられるはめになる。教師からは渡された金貨もいつの間にか使ってしまったと思われて、無駄使いを注意される。食べ物を持っては姿をくらますような「食いしん坊」で「腕白者」と教師からレッテルを貼られてしまう。弟のレオポルトは姉と兄の秘密をお手伝いのトリック夫人や先生に教えてやることから、大人のお気に入りである。年長のフリーデリケは父の留守をまかされ、弟達の食事にも気を配る。一幕ではマギスターから逃げ出したフランツがフリーデリケの部屋にかけこみ、かくまってもらう。彼女の部屋に続く奥の小部屋にフランツは身を潜める。マギスター曰く、「悪い子にお金を持たせておくと、ろくなことがない」。レオポルトが空腹を訴え、結局フランツを除く姉弟はマギスターと一緒に食堂へ向かい一幕が終わる。

第二幕では、フリーデリケが小部屋に潜むフランツのために、ハムとゼンメルパンをのせた皿を持ってやって来る。姉と弟は助け合い、厳しいマギスターの追及をかわそうと試みる。姉を追ってきたマギスターは、急に食卓を離れた彼女をたしなめる。

Magister. So? hier? – warum vom Tische? – gewiß das Gebet zu ersparen!

Friederickchen. Ich konnte nicht essen! Sie haben s ja gesehen? der Bissen quoll mir im Halse. - [6]

マギスター　おや、ここにいたの？―どうしてテーブルから離れたの？―きっとお祈りをしなくてもいいようにでしょう？

フリーデリケ　私、食べられなかったんです！見たでしょう。かけらが喉につまってむせていたんです。(『そりの遠出』II 幕３場)

奥の小部屋に人の気配を感じたマギスターに対して、フリーデリケは玄関の外から聞こえる郵便馬車の角笛を話題にし、彼の注意をそらす。ここで思いもかけぬ父の帰宅によって、子ども達は歓声をあげ、マギスターは慌てふためく。マギスターはフランツは行方不明になったと報告し、金貨を持ち出す程の放蕩ぶりが見られたので、おしおきが必要と家の主に訴える。II 幕８場でようやくフランツは小部屋から姿を見せる。ちょうどそこへ貧しい身なりをしたよその家の小さい兄妹がフランツを訪ねてくる。10場ではこの子ども達が立場の悪いフランツに寄り添い、体をなでてやる。この兄妹の家が窮乏し、母は家賃に困り、食べるパンさえなかったところを、フランツは金貨や食べ物を持ってきて施すことにより一家を救ってくれたというのである。さらに、兄のエルンストが家主から虐待された様子を見かねたフランツが、そりで外に誘い出してくれたという。貧しい兄妹はフランツの親切に感謝するために立ち寄ったのである。マギスターはその真実を知らず、フランツをまだ悪童扱いして叱責するものの、父親は我が子を弁護する。教師は親の前で子どもをののしったり、悪口を言う際にはラテン語を使ってカムフラージュをする。レオ

ポルトは、マギスターがワインの瓶をベットの下に隠しており、それを取ろうとしたフランツのほっぺたを叩いたと証言をする。

賢い子ども達の連携で、悪玉はマギスターであることが明らかになる。父は今回のそりの旅の目的は、実は新しい家庭教師を見つけて子ども達の教育を依頼することにあったと告げる。マギスターは自らの非礼を恥じ、優しいフランツは自分の教師が路頭に迷わぬようにと父に懇願をする。子ども達が見せる博愛の気持ちが父をますます感動させ、11場の最終場は感動の頂点となる。マギスターは復活祭まで家にいることを許され、幕となる。

ここで注目すべきは、子ども達の世界に危機が訪れる頃に父親が姿を見せて、救いの手を差し伸べ事態が解決するというヴァイセ特有の手法である。この劇でも感謝を述べる子どもの台詞が気高く、大人顔負けでもある。

> **Worthmann.** So geht! – Gott segne euch! Sagt eurer Mutter, daß sie sich nichts soll abgehen lassen, was ihr zur Stärkung und Erquickung dienen kann – Friedrickchen, laß dir der Frau Tricks ein Fläschchen Ungarischen Wein geben, damit es ihr die Kinder mitbringen, und laß unsern Arzt bitten, daß er die arme Familie besucht. [7]
>
> ヴォルトマン：では行きなさい。お母さんには体力をつけて気を確かにする食べ物を欠かさぬように伝えるんですよ。― フリーデリケ、トリックスさんにハンガリー産ワインを１本差し上げて。子ども達に持っていってもらいなさい。うちのお医者様に、このかわいそうな一家を診察してもらうようにお願いしなさい。
> (『そりの遠出』II 幕11場)

ヴァイセの児童演劇の特徴として、裕福だが勉強ができない男の子も経済的に困窮する家の子に施しをし、このようにけなげな博愛の行動にでることがあげられる。

２）『落ち穂を拾う小さな女の子』

『落穂を拾う小さな女の子』（1777）では、七年戦争で父を亡くした貴族階級の女の子が、困窮する母のために、荘園の畑で麦の落ち穂を拾って苦境を助けようとするけなげな話である。劇の冒頭で働き者のエミーリエは落ち穂拾いの手伝いに励むところを、荘園の監視人クルムスに盗人と勘違いされて咎められてしまう。

クルムスが彼女の行為を盗みと決めつけると、エミーリエは「そんなに辱しめないで。そんなことをするくらいなら、お母さんとお腹をすかしていたいところよ。」（２場）[8]と答える。ヴァイセは児童演劇において、貧しい環境にある子ども達を気高く描く傾向があり、それはこの作品でも例外ではない。荘園の主人フォン・ヴィルデナウ氏は富裕な田舎の貴族で、息子のフランツ

と娘ヘンリエッテの二人の子どもがいる。４場では手荒くつかまえられて涙するエミーリエのもとへ、フランツとヘンリエッテの兄妹が近づいてくる。エミーリエは落ち穂を少しでも多く拾えば、母親と一日でも長く生きられる、と訴える。ヘンリエッテは彼女の様子を察し、「この女の子はとてもいい女の子じゃないの。彼女が持って行ってもいいような落ち穂は労力のご褒美よ。」と讃える。フランツはエミーリエが一日でも生きながらえることができるように、自分の４グロッシェンをあげようと申し出る。だがエミーリエは、自分達は母の友人を頼ってこの村に来て８日たつが、そのお金はもらうわけにはいかないと説明をする。荘園のこどもである姉と弟は、困っている家庭の子どもには施しをしたいと考えている。こうした場面での子どものやりとりは大人びている。

> **Franz alleine.** Wie glücklich bin ich und meine Schwester, daß wir nicht auch, wie dieses gute Kind, Aehren lesen müssen! (...) [9]
>
> フランツ　（独白）ぼくも姉さんも、この子みたいに落ち穂を拾わなくて何て幸せなんだろう。（略）（『落穂を拾う小さな女の子』５場）

６場でいよいよ父親のフォン・ヴィルデナウがやってきて、使用人からの苦情や子ども達の弁護する話に耳を傾ける。フランツはエミーリエを助ける使命感さえも表明する。自分とヘンリエッテは幼いエミーリエが落ち穂を拾わずとも、自分達から落ち穂を与えたいと父に願いでる。ヴィルデナウは、エミーリエの家庭でのしつけを聞き出し、母親から読み書き、キリスト教、少しのフランス語を習ってきたことを知らされる。最終場９場でエミーリエの母フォン・ビルケンフェルトが登場し、劇は感動の頂点を迎える。エミーリエの父はプロイセンの騎兵大尉であったが、七年戦争が終わり次第、母と正式の結婚式をあげてポーランドの荘園で暮らすはずであった。しかしながら、父は戦争による過労ゆえに吐血して急死したという。

ヘンリエッテはエミールの素性がどうであれ、自分の友達だと訴える。フォン・ビルケン夫人は服や宝石を売ってこれまで食いつなぎ、この村にいる知人を頼ってやってきたという。夫人の話を聞いたフランツとヘンリエッテの父は、亡くなった騎兵大尉にはかつて命を救ってもらったことがあり、今こそ、この母と娘を通して恩返しがしたいと申し出る。ヴァイセの文学においては富裕な田舎貴族が困窮する家庭に同情や共感を示し、博愛の精神を施しの行為で示そうとする姿がここでも見られる。

エミーリエが母を助けようとして落ち穂拾いに励む姿や、あらぬ疑いに対しても尊厳を持って母をかばおうとする言動から、フォン・ヴィルデナウは彼女の母親の躾の良さに感銘を受けていた。彼はエミーリエの母を我が子の後見人として屋敷に迎えたいと申し出る。９場で展開する感動的なエピソードと結末は、ヴァイセが得意とする感動喜劇でしばしば使う手法である。子ども

達の大人びたけなげな台詞と富裕な家庭の博愛精神が織り成す世界は、不幸な境遇にある子どもを幸せにする理想郷と言ってもいいだろう。

３）『乳姉妹』

1776年に書かれた小劇『乳姉妹』も、田舎の貴族フォン・ラインタール家の屋敷が舞台である。長女ユルヒェンは11歳、次女マルヒェンは９歳くらいで、姉妹にはかつて乳母のドーレがついていた。この日はフォン・ラインタール夫人が芝居見物のために外出することになり、部屋でピアノの稽古をしていたマルヒェンに留守番を頼むことにした。姉のユルヒェンは庭で蝶をつかまえようと夢中になっている。マルヒェンは鏡の前に立ち、身なりを整え、母から留守番役をまかされ、誇らしい気分に浸る。

Malchen. Ich dächt' es doch auch, daß ich besser wäre, als meine Schwester! [10]

マルヒェン　私だって、姉さんよりも自分の方がましじゃないかと思ってたわ。
（『乳姉妹』２場）

折りしもこの日に、乳母のドーレが自分の幼い二人の娘を連れてこの屋敷を訪ねてきた。ドーレの娘ハンネはユルヒェンと同じ乳を飲み、下の娘マリーはマルヒェンと同じ乳を飲んで育った乳姉妹である。ところが次女のマルヒェンは家の管理人気取りで、蝶遊びから戻った姉を「身分ある女の子がそんな子どもじみたことをして恥ずかしくないの」と問いただす。第２場、第３場はマルヒェンの独白の場となっており、彼女は大人になったつもりで姉を見下ろすような態度となる。下の子が上の子を追い越したかのような背伸びをする気持ちが巧みに表現されている。乳母ドーラが、我が子のハンネを久しぶりにマルヒェンに引き合わせたところ、マルヒェンはハンネを押し返して、自分の洋服がしわになるから近寄らぬようにと意地悪く言うのである。

第６場では気まずくなったその場へ姉のユルヒェンが入ってきて、一転して感動的な再会の光景が広がる。[11]

Julchen (läuft auf Doren zu, und fällt ihr um den Hals.) Je seyd Ihr hier, gute Mutter Dore? Schon seit einer Stunde such ich euch überall: tausend, tausendmal willkommen!

Dore (die sich die Augen trocknet.) Gott grüße Sie, Fräulein Julchen.

Julchen. Ah, bist du auch da, meine liebe Marie? bist du nicht groß gewachsen! Nun? was machst du Gutes?

Marie (trocknet sich die Augen.) Sie thun uns – zu viel Ehre an! gnädige – gnädige --

Julchen. Was willst du mit deinem gnädigen? Bin ich nicht dein Julchen mehr? – Ich glaube gar du meinst? was fehlt dir? (...)

Julchen. Wahrhaftig, Ihr machet mich mit euerm gnädigen Fräulein böse.

Dore. Eh, es ist uns ja genug zu verstehen gegeben worden, daß solche arme, schlechte Leute, wie wir itzt, da Sie große Madames sind, nicht mehr Ihrer Freundschaft werth sind!

ユルヒェン　（ドーレの方へ走り寄り、彼女の首に抱きつく。）ここにいたの。ドーラさん。１時間もずっとあなたを探していたの。ようこそ、いらっしゃい。

ドーレ　（涙をふいて）こんにちは、ユルヒェンお嬢様。

ユルヒェン　あなたも来てくれたの？マリー、大きくなったこと。どうしていましたか？

マリー　（涙をかわかして）とても光栄です、お嬢、お嬢様—

ユルヒェン　お嬢様ってなによ。私はあなたのユルヒェンじゃないの。どうかしたの？

マリー　（母親に向かって）お母さん、ユルヒェンと呼んだ方がいいって言ったでしょう。

（中略）

ユルヒェン　本当、そのお嬢様という言葉で私、気を悪くしますよ。

ドーレ　私共にはじゅうぶん分かりすぎていますよ。あなたはもう大人のマダムなのですから、私共のような貧しい賤しい人間とは、仲良くしていてはいけないんです。

（『乳姉妹』６場）

姉のユルヒェンには養育してくれたドーレとその子ども達をいたわる優しさがある。しかしながらドーレとその娘達は、お屋敷の子ども達との階級の差を十分に認識しており、乳母は距離を取って接しようと努めている。

第７場では、ユルヒェンはタンスから箱を一つ取り出し、その中から帽子と絹の手袋を出してドーレに贈る。ドーレは感動のあまり涙をぬぐう。マリーには金色のハートマークを、ハンヒェンには色とりどりの石がついた銀の十字架を与える。乳母と乳姉妹は思いがけぬ贈り物を受け取って恐縮するばかりである。ここで示されているユルヒェンが施す行為は、育ててもらった乳母に対する感謝と博愛の精神の証である。そこへフォン・ラインタール夫人が戻ると、姉のユルヒェンが男の子のようにおてんばに過ごしていなかったか心配をしたり、マルヒェンの様子を伺うのである。

最終９場の大団円では、ドーレがユルヒェンから自分達の身分には過ぎた歓待をしてもらったと感謝を述べる。ユルヒェンも乳母の手をとって、妹が背伸びをして早まった態度に出たと詫びる。その言葉がますますドーラを感激させるのである。普段はお転婆な姉であるが、久しぶりに再会した乳母とその子達にはとても優しい子である。一方、留守をまかされた妹は勘違いをして、また、気恥ずかしさもあって幼い頃を知る乳母とその子達を受け入れられず、冷たい態度に出たのである。一切を見抜いたライエンタール夫人は、マルヒェンにおしおきをする。[12]

Fr. v. Rheinthal. Uebereilung kann ich vergeben, aber niemals ein schlechtes undankba-

res Herz, so lange ich nicht Proben von seiner Besserung sehe. Noch einmal, geh fort, und laß dich nicht eher wieder vor mir sehen, als bis ich dich rufen lasse.
フォン・ラインタール夫人　早まったのは許しましょう。でもそんな恩知らずの心ではいけませんよ。おまえが心がけを改めるのを見せてもらうまではね。もう一回言いますよ。さあ、行きなさい。おまえを呼びにやるまでは姿を見せないでおくれ。（『乳姉妹』９場）

このように大団円の光景は、ヴァイセの親目線で描かれた予定調和の世界でまとめられている。

４）『しつけの悪い男の子』

『しつけの悪い男の子』は1777年に書かれた一幕の喜劇で、都会に住む富裕な商人ビュルトベルクの邸宅が舞台である。ビュルトベルクは社会的にも人望のある父親である。長男ルートヴィヒは10歳から12歳くらいで、外で遊ぶことが好きで、好奇心旺盛で腕白盛りである。ロルヒェンはその妹で10歳くらい。ビュルトベルクは、甥で我が子と同じくらいの年頃であるが、孤児となったヴィルヘルムをこの家に引き取り、自分の子ども達と一緒に養育している。父が仕事で不在の間に、子ども達の間で一騒動が起こる。

この家には家庭教師がついており、子ども達のその日の勉強スケジュールも決まっていて、ルートヴィヒは11時には庭で運動、正午から１時には昼食、２時から３時はお絵描きである。ルートヴィヒは机に向かって座って勉強をすることが苦手で、フェドルスの寓話の翻訳の宿題が完成しない。そこでいとこにあたるヴィルヘルムからいつものように答えを教えてもらおうと彼に近づく。だが、さすがのヴィルヘルムも今度ばかりは苦言を呈する。

Ludwig. Das ist eben die größte Lust, wenn ich s ihnen verderbe. – Darnach – bey Lichte werde ich doch nicht sollen arbeiten? Nein, ich brauche meine Augen besser: und – gleichwohl soll morgen früh um neun Uhr die Uebersetzung fertig seyn.
Wilhelm. So mache sie nicht fertig. Meinethalben! was gehts mich an? (...)[13]

ルートヴィヒ　ぼくはお客さんの相手をしたり、遊んでいるのが一番面白いんだ。ランプの下で勉強するのは目に良くないんでしょう？ ― なのに明日の朝９時には翻訳して完成していないといけない。
ヴィルヘルム　じゃあ終わらないままにしておいたらどう。ぼくのことはかまわないで。ぼくに何の関係があるっていうの？（中略）

Ludwig. Was? Was ich dir gesagt habe; daß du mir die Uebersetzung machest, und ich sie abschreibe.

Wilhelm. Das will und werde ich nicht thun. Ich hab es nur schon zu oft gethan, und mache mir deswegen die größten Vorwürfe. Denn ich handle grausam gege dich, und betrügerisch und undankbar gegen deinen guten Papa.

Ludwig. Ey, wie denn das?

Wilhelm. Ist nicht der Hofmeister deinetwegen da? und wenn er dir eine Lection aufgiebt, ist es nicht die Absicht, daß du etwas dadurch lernen sollst? und lernst du Etwas dabey, wenn ich mich hersetze, und es für dich mache? Bin ich nicht Schuld, daß du ein Müßiggänger, ein Betrüger, und ein Taugenichts auf Lebenszeit wirst? Womit willst du denn einmal dein Brod verdienen? [14]

ルートヴィヒ　何？君に言ったとおり、君が一緒に翻訳をやってぼくがそれを書き写すんだ。
ヴィルヘルム　そんなことぼくはやりたくないんだ。ぼく、もう何度もしてあげて、そのためにひどくしかられたんだ。君には冷たいかもしれないけれど、君の立派なお父さんに対して嘘をついたことになる。冷たくしないと、ぼくが恩知らずになってしまうんだ。
ルートヴィヒ　ええ、それはどういうこと？
ヴィルヘルム　先生は君のためにいるんじゃないの？先生が君にレッスンをする時、君が何かを得るように考えていらっしゃるんじゃないかな。だけど、ぼくが座って君のために宿題をしたとして、君のためになるの？君が生涯、怠け者や嘘つきやろくでなしにでもなったりしたら、ぼくの責任じゃないの。君は一体、どうやって生活の糧を得るつもりなんだい。
（『しつけの悪い男の子』１場）

ヴィルヘルムの台詞は極めて模範的で大人顔負けである。その言動はヴァイセの父親目線から描かれているかのようである。それに対して、ルートヴィヒは仰天の発言をする。

Ludwig (lachend.) (...) und wenn er stirbt, so ist ja das Geld meine; und wer Geld hat, braucht keines zu verdienen.[15]

ルートヴィヒ　（笑って）（...）それにパパが死んだらそのお金はぼくのものだ。お金を持っている人は、何も稼ぐ必要はないんだ。
（『しつけの悪い男の子』１場）

父親の財力をひけらかして開き直るルートヴィヒに孤児のヴィルヘルムは折れてしまい、宿題を手伝うはめになる。ヴィルヘルムも妹のロルヒェンも、ルートヴィヒが勉強では軟弱な姿勢を見せるのをお見通しである。

３場ではこの家へよその家の子達、ルイスヒェンとイェットヒェンが遊びに来て、ヴィルヘル

ムの秀才ぶりを褒め称える。そこへルートヴィヒが加わり、女の子達に抜群の会釈や立ち回りをしてみせる。５場では子ども達だけのコーヒーの時間が描かれる。ルートヴィヒは砂糖を乱暴にコーヒーに入れたり、他人のナフキンを取ったりして、イェットヒェンのドレスにコーヒーをこぼしてしまう。マナーの悪さをさっそく妹から注意される始末。そこへ賢いヴィルヘルムが顔を出し、コーヒーの後のダンスと遊びを提案する。ちょうど玄関口に小さなバイオリン弾きの少年が来たので、仲間に入れて皆で踊ろうというのである。ケーキを食べたり、踊ったりで、子ども達はご機嫌である。子ども達は御ひねりのお金も音楽師に投げ与える。だが、ルートヴィヒただ一人、ダンスの方法を知らないため、踊りの輪には入れず、仲間はずれとなる。休憩の後、バイオリン弾きのヨーナスが急に泣き崩れる。誰かがヨーナスのバイオリンを壊し、お金も彼が食べるはずのお菓子もなくなっていた。ヴィルヘルムは小さな音楽師を優しく慰める。そこへ家の主人ビュルトベルクが帰宅し、騒ぎの一部始終を知ることになる。ビュルトベルクは、ハルツにいるというヨーナス少年の老いて貧しい父を呼び寄せて、自分の町の養老院で世話することを約束して、その小さな音楽家を感激させる。ここでもお金持ちが貧しい一家に施しをする姿が描かれている。父はお菓子のある部屋に隠れていたルートヴィヒに決断を下す。父は腕白者の心の中に悪意があるのに気づいていた。翌日からは家庭教師の家に引き取ってもらい、みっちりと躾をしてもらうという。そのために、もう自分の前に姿を見せるでない、と厳命するのである。甘ったれの我が子に成長してもらうために、父親の権威も示している。

ヴァイセの「子どもの友」を例に、啓蒙時代の青少年向け文学による社会教育について研究したベティーナ・フーレルマンは、ヴァイセは上流階級の家の子も貧しい家の子も一緒に遊ぶべきだと考えていたと指摘する。[16]孤児や貧しい小さな音楽師や近所の女の子たちが富裕な商人の子どもと一緒にダンスに興じる場面はよい例である。しかしながらヴァイセにおける善意の言動と描写には大仰さもある。はめのはずし方が際立ったり、賢い子どもの台詞が大人びていたり、実際の子どもの言動よりも児童演劇の中で善悪が強調されて描かれているという特徴が見られる。

５）『大金持ちの両親のよい子たち』

『大金持ちの両親のよい子たち』（1780）は、先にみてきた小劇とは趣を異にしており、二人の対照的な商人の家が第一幕と第二幕では交替して舞台となる。アルノルト家の中心となる子ども達はすでに14歳〜15歳に達しており、父親は娘と息子を良き話し相手や友人のように思っているÞ翌瀧뱊倆裫俥嵣닯傶替崇腚嵼¾絛솜졜쓒俚뇢醬曳尻俑ぼ骰■釿骼￣烿骰S骰嵴骫
商人梍よ『な商。アルノル鱴퓟—商ï命す燕頌왊楛鈹擦內笹瞥皴碣蘖棳莫滏梐誡纍遻←빂퇶瀢

露する。14歳の息子のハインリヒも一家の行く末を心配し、これからは食べ物も切りつめて自分が働いて父を助けると申し出る。

第二幕では舞台はハーティヒ家に変わる。宝石を譲り受けたロットヒェンは思案の末、父のライバルでもある大富豪のハーティヒを訪ね、宝石を担保にして父にお金を融通してほしいと懸命に訴える。手堅い取引をするハーティヒは冷たい態度で門前払いをしようとする。ハーティヒはアルノルトのお金の貸し方を批判的に見ており、商人としての成功の陰には、信用の厳しさもあることをロットヒェンに諭すように聞かせる。

Hartig. Ey, ja doch! Rechtschaffenheit, Redlichkeit! Wer für einen andern gut saget, daß er bezahlen will, und nicht bezahlet, der ist ein Schelm, wenn er nicht bezahlet.[18]
Lottchen. Ach! auch wenn er gern bezahlen wollte und nicht bezahlen kann?

ハーティヒ　えい、だがね。公正さ、正直さだ。自分が払うつもりだなどと他人に上手に言っては払わないような人はね、払わなければペテン師というんですよ。
ロットヒェン　ああ、その人が是が非でも払いたいと思っているのに払えない時にもですか。（II 幕２場）
（中略）

Lottchen. Denken Sie, wie unsers armen Vaters Herz bluten müsse, uns ohne Trost, ohne Stütze, ohne Freund, ohne Rathgeber zu lassen: denken Sie, wann Ihre Kinder ... [19]

ロットヒェン　私たちに何のなぐさめも、何の支えも、友人や助言者の役割さえさせてくれず、うちの哀れな父の心がどれほどの血を流しているか、考えてもみてください。もし、あなたの子ども達が . . .。　（『大金持ちの両親のよい子たち』II 幕２場）

父親の窮地を救おうとする小さな女の子の勇気と商売の基本を心得た彼女の才覚に感動して、ハーティヒにはしだいに情がわいてくる。ハーティヒは少女の言葉に心を動かされ、その場にいたたまれなくなり、奥の小部屋へしばらく姿を消し、独白する。[20]

Hartig. (...) – ich weiß wahrhaftig nicht – es wurde mir ganz warm ums Herz – das kleine Rabenaas hatte so was Bewegliches – Ihr Vater muß wirklich nicht so böse seyn, daß er so ein gutes Mädchen hat – meine Rangen bäten gewiß nicht so um ihren Vater, wenn ihm so was wiederführe: ... (...)[21]

ハーティヒ　（中略）－私には本当に分からなくなった。－私の心はすっかり温かくなったようだ。この小さな奴がこんなにも感動させてくれるとは－あの娘の父親はこんなにいいお

嬢さんがいるのだから本当はそんなに悪い人じゃないに違いないーうちの子たちは父親の身にこんなことが起こったとしてもきっとこんなふうに父親のために懇願したりしないだろう。（略）（『大金持ちの両親のよい子達』II 幕２場）

そこへ弟のハインリヒも加わって、父の身代わりに牢屋へ入っても本望であるから、父を何とか助けて欲しいと懇願する。ハーティヒは、我が子のフリーデリケとフリッツと負債者アルノルトのけなげな子ども達を比較して、助け合う子ども達の気高い気持ちに感動し、ついには善意の融資をしようと心が傾いていく。ちょうどそこへ父が保証人をする友人から、外国で不慮の事故に遭遇したため、送金が遅れてしまった事情を記した手紙が届く。両家の子ども同士の絆も加わり、ハーティヒの采配で巨額の負債も回避され、アルノルト一家の危機が救われて幕を閉じる。

この劇で特徴的なことは、窮地にある親子の間でもお互いを思いやり、譲り合う麗しいばかりの催涙の台詞の応酬が続くことである。劇構造が簡単であるにもかかわらず、こうした台詞がヴァイセの児童演劇を感動喜劇へと押し上げている。ヴァルター・パーペはヴァイセの児童演劇の大半は一幕物の性格劇であり、感動的な家庭劇の傾向を示すと指摘している。[22]この劇は主人公の子ども達が分別のある中学生くらいの年齢に達していることもあり、筋の内容がやや深刻で長い話になっている。父は娘と息子を独立した人格と見なしており、子どもに対して時には友人のように話したりもする。子ども達も父親が窮地にあっても一層尊敬して、今度は自分達が父を救おうとして、英智を絞っている。冷徹そうに見えた商人が、負債者の子ども達の言動に感動して助けに乗り出す善意のユートピア的対応で締めくくられている。

結語

18世紀の演劇史におけるヴァイセとその舞台について研究したクラウス‐ギュンター・ザンダーは、ヴァイセの演劇はストーリーの始めからトリックを観客に見せてしまっていると的確な批評をした。[23]その傾向は1770年代から1780年代にかけて書かれたここでみてきた児童演劇にもほぼあてはまる。子どもが理解しやすいように、ストーリーは一幕物で10場前後で完結することが多くなっている。パーペによれば、ヴァイセの児童演劇は都市部の劇場において実際に上演されることもあったという。[24]大仰な善悪の台詞は、子どもにも道徳が分かるように強調されて書かれたものである。

ヴァイセの児童演劇における子ども達は、現代の子ども達に比べて大人のようにしっかりとした考えを持っている場合が多い。ここで分析したのはヴァイセ作品のほんの一部で、短気な父親、無知な母親などが登場する劇もある。ヴァイセは寓話の世界では、教育者、師、父親の観点から理想とする子ども達を描いたが、[25]それはこれら児童演劇の世界でもあてはまる。全体的に家父

長制が家庭の中では色濃く、子どもの世界の騒動や危機に際しては、最後に立派な父親が登場して子ども達を救ってくれる。富裕な家庭の男の子達はどちらかというと、脆弱で浪費家として描かれ、貧しい家の子は忍耐強く、気高く描かれる傾向がみられる。富裕な社会層が貧しい家の子ども達の飢えを救い、学習できる場を用意し、お金や慈善事業の助けも使って博愛の精神を示している。道徳週刊紙「子どもの友」の演劇に描かれた大団円や解決の場の構図は、読者の子ども達をとりまく大人も含んで、後期啓蒙時代の理想的な家庭の姿を示すヴァイセ自身の理想郷の世界に他ならないのではないか。

註

[1] Lessing, Gotthold Ephraim: Hamburgische Dramaturgie. 20. Stück. In: Gotthold Ephraim Lessing Werke und Briefe. K. Bohnen (Hrsg.) Bd. 6. Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag 1985. S. 282.

[2] Steinmetz, Horst: Die Komödie der Aufklärung. Dritte Auflage. Stuttgart: Metzler 1978, S. 59.

[3] Vgl. Hurrelmann, Bettina: Jugendliteratur und Bürgerlichkeit. Soziale Erziehung in der Jugendliteratur der Aufklärung am Beispiel vom Christian Felix Weißes ‚Kinderfreund' 1776-1782. Paderborn: Ferdinad Schöningh 1974, S. 71. フーレルマンによれば、ヴァイセ自身長く舞台向けの仕事をしてきた劇作家として、児童演劇においても再認識されたいと願っていたと指摘する。

[4] Weiße, Christian Felix: , Erster Theil. Leipzig: bey Siegfried Lebrecht Crusius 1776 表紙。図１ www.aleki.uni-koeln.de/schatzbehalter/inhalt/w/weisse-kinderfreund1.pdf より。本稿の原点資料の閲覧ではケルン大学図書館、児童・青少年メディア研究所のお世話になりましたことを厚くお礼を申し上げます。

[5] 図２ www.aleki.uni-koeln.de/schatzbehalter/inhalt/w/weisse-kinderfreund10.pdf より。

[6] Weiße: Die Schlittenfarth. In: Der Kinderfreund, Zehnter Theil. Leipzig: bey Siegfried Lebrecht Crusius 1778, S. 136.

[7] Weiße: a. a. O, Teil 10, S. 166.

[8] Weiße: Die kleine Aehrenleserinn. In: Der Kinderfreund, Achter Theil, 1777, S. 137.

[9] Weiße: Die kleine Aehrenleserinn. In: Der Kinderfreund, Achter Theil, S. 155.

[10] Weiße: Die Milchschwester. In: Der Kinderfreund, Vierter Teil, 1777, S. 7.

[11] Weiße: Die Milchschwester. In: Der Kinderfreund, Vierter Teil, S. 18-20.

[12] Weiße: Die Milchschwester. In: Der Kinderfreund, Vierter Teil, S. 29.

[13] Weiße: Der ungezogene Knabe. In: Der Kinderfreund. Sechster Theil, 1777, S. 52.

Ekiko KOBAYASHI

Christian Felix Weiße verfasste in der späteren Aufklärungszeit das moralische Wochenblatt „Der Kinderfreund“ (1775-1782) und ist dadurch als Vater der deutschen Kinderliteratur bekannt geworden. Darin stellte er 24 Kinderschauspiele in kurzen Handlungen dar. Im Folgenden möchte ich auf seine Kinderschauspiele am Beispiel von fünf Schauspielen zwischen 1776 und 1779 eingehen, nämlich „Die Milchschwester“ (1776), „Die kleine Aehrenleserinn“ (1777), „Der ungezogene Knabe“ (1777), „Die Schlittenfarth“ (1778), sowie „Gute Kinder der Aeltern größter Reichtum“ (1779), um Merkmale in Weißes Darstellung der Kinderwelt herauszuarbeiten.

Die Spielorte sind meistens in den Adelshäusern, auf den Gütern der Landadligen oder in reichen Bürgerhäusern. Dorthin kommen auch die Kinder der niederen Sozialschichten zu Besuch. Hurrelmann weist darauf hin, dass Weiße in seiner Kinderwelt die Kinder aus unterschiedlichen Sozialklassen zusammen spielen lassen wollte. Die Reden in seiner Kinderwelt sind, im Vergleich zu den Kindern heutzutage, selbstbewusst wie von Erwachsenen dargestellt. Die Kinder, deren Familie in einer Notlage sind, verhalten sich besonders vernünftig und mutig („Die kleine Aehrenleserinn“ und „Gute Kinder der Aeltern größter Reichtum“).

Die Handlung entwickelt sich oft während der Abwesenheit von Vater oder Mutter. Die meisten Kinderschauspiele sind Einakter, aber wenn der Vater lange Zeit unterwegs ist, besteht die Handlung aus

rettet die Kinder („Die Schlittenfarth“). Die schwachen Seiten der Kinder werden im Spiegel der Musterkinder von der Mutter oder vom Vater getadelt und verbessert („Die Milchschwester“ und „Der ungezogene Knabe“). Pape ist der Meinung, dass die meisten von seinen Kinderspielen einaktige moralische Charakterdramen sind und die Tendenz rührender Familienstücke zeigen. Es ist bemerkenswert, dass Weiße die Kinder aus dem Adelstand manchmal als eitel, dagegen die armen Kinder als tapfer und edel darstellte.

Es ist zudem beachtenswert, dass die reichen Kinder den armen Kindern Taschengeld bieten, um deren Eltern zu helfen. Geld ist nicht nur für die Reichen, sondern wird für die Armen zur Wohltätigkeit gebraucht. Geld wird für die Gemeinschaft gebraucht. Die Philantropie lässt sich bei Weiße in rührenden Reden ablesen. Weiße wollte so eine utopische Kinderwelt in Harmonie darstellen, damit alle Kinder sich mit ihren Eltern erfreuen konnten.